
存在するものしないもの

篠原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

存在するものしないもの

【Zコード】

Z9217D

【作者名】

篠原

【あらすじ】

ある日葉子が聞いたなんでもないようなオカルト話。それが現実になる・・・

前編（前書き）

前編はコメディ的な感じで後半はホラーで行こうと思っています。

「皆、頑張ってるー？」

そんな陽気な声をかけながら入ってきたのは、クラスリーダーの皆野葉子だつた。

しかし中のメンバーはその声とは裏腹にとてもイラついた様子で葉子を睨む。

ここ、桜葉高校は今学園祭準備の真っ最中。

残りあと一週間とあり、お化け屋敷という大掛かり作業が必要なものを決めた割りに取り掛かりが遅かつたこの2・7はまだ準備が完璧に終つておらず、他のクラスがラストスパートに掛かつたのにかかわらず未だ中盤でもたついていた。

そんななか、息抜きのためにとクラスリーダーである葉子は担任から徴収したお金で近くのコンビニへ行き、飴など作業しながらでも食べられるお菓子を買いにいったのだが、どうやらそれが反感をかつたらしく

「おまえ、クラスリーダーなんだからちつたあ準備手伝えよーー！」

「だからホラ、飴ちゃん買って来たじゃない」

「飴買う暇があれば、こっちの色塗り手伝えーー！」

「駄目よ。私（5段階評価で）美術1だから」

そりなんでもないよつて腰に手をあてさうつと言つた葉子だが、

「いばれることか……」

言われた男子は手に持っていた筆を折りそうな勢いで葉子に食つて掛かる。が

「でもさ、杉野だつてアタシと同じぐらいじゃん」

「な、なんでそれを……」

「この間廊下に飾つてあつた皆の校舎風景見て。だつてアレはどう見てもこの世の風景には見えない。いうなら地獄？アレみてアンタのだけタイトルは『パラレル世界』かと思った」

「アレは夕方の風景だッ！！」

「え！？嘘！？業火に苦しむ人々の図かと思ったのに！」

「それは下校中の生徒だッ！！」

あえなく撃沈され、しぶしぶ自分の作業（色の配色、パレットを洗つたり水をかえる）に戻つた杉野を見た葉子の親友、清水知里がこれ以上ココの土氣を下げて殺意を上げないようにと葉子をもともとやつっていた仕事場（大道具作り）につれていく。

「はいはい、いい加減こつちの仕事手伝つてねー。アンタ、美術は1のクセに技術は5なんだから」

「なんだろう。アタシ生前は大工かなんかだったのかな？」

「設計には向いてないけどね」

そつしてまた再び作業が開始される。

最初は手中してダンボールを切つたり等して壁や通路、棺桶作りに励んでいた葉子・・・だが

あ
暇
！

暇！じゃないでしようが！まだ半分も仕上かっていないのに！」

卷之三

「いいのいいの瞬があるんならせわと手を動かせばいいじゃな

い。そしたらどうなん形が変わつてつておもひこでしょ？」

ダントンボリ川は所詮ダントンボリ川じゃなし
知里……形が変わつてもダントンボリ川には所詮ダントンボリ川じゃなし

「アンタ……馬鹿のクセにそりこりとさだけ正論ぶつけてくるの

ね

そういうて知里は大きなため息をつくと、葉子に紐と小さな鍵を何個か渡す。

「じゃ、」の鍵に、「」の紐みつあみして通す作業でつだつて

「え? 何この鍵? 心の鍵つてやつですか?」

「葉子、アンタの口にも鍵かけてあげようか?」

そこは普通チャックでは・・・と思つたが、知里の田はこつにもまして本気だつたので素直に謝ることにした。

無二無三

「葉子・・・・・クラスリーダーが文化祭実行委員会の話聞いてなくてどうするのよ・・・・・

「うめん。ちょっと睡魔さんが楽しそうなお誘いくれて……」

「それにつられて夢の世界に旅立つたのね・・・」

「ほら、誘惑には勝てないって奴？で、結局この鍵つてなに？」

アンタね・・・まあ、いいか。最初ツから説明するからその使え

「ありがとう…せつすが知り！頼りになる

「ありがとう！さすが知里！頼りになる」

「なんで貴方がこのクラスのリーダーなのか理解に苦しむわ

そういうて呆れ顔の知里の肩をぽんぽんと一度たたくと何故か頭を三度バシバシたたかれた。そして、鬱憤晴らしがおわったのか知里は作業を続けながらも説明する

「いい? 今回のお化け屋敷は普通のとちょっと変わった感じにしょうってことだ、使わないクラスを借りて、一つ目のクラスで鍵番をしているお化けの目を盗んで最初受付で渡された鍵を取った鍵の変わりに鍵箱の中に入れてるの。もし鍵番をしているお化けに見つかつたら失敗。次のクラスの奥にある5つの箱の中からそのとき持っている鍵で開ける箱を制限内に探さなきゃいけないの」「ふんふん。でもそれって5個ぐらいなら全部あければ済む話じゃない」

「だから制限かけてるの。5つのうちあけていいのは2つ。もし鍵箱から取った鍵なら箱番お化けがヒントをくれる手はずになつていいの。それで、めでたく5個中2個入つてる宝、まあ目印のメダルだけど。手に入れたら成功。ハズレのビー玉を手に入れたら失敗。教室から出たとこで何を手に入れたかみて、それに応じた賞品をプレゼント。どう? 思い出した?」

「あーなるほど! なんとなく思い出した」

「そう。それはいいんだけど。コレ、ほとんど貴方が考えた案ですけど?」

そう知里に言われ、葉子はしばらく考え込むが最終的に思い出せなかつたのかアハ つとおどけた風に笑いごまかしをはかるが、隣で一緒に作業していた知里の目が全然笑つてないことに気がつき、大人しく作業に戻る。

そしてそれから数分後

「ねー」

「葉子、貴方の頭には黙つて作業するところ言葉はないのかしら?」

「あんつていえばあるけどわざと使つて近くしちゃつた」

知里は本田一度田のため息をつき、諦め氣味に葉子に尋ねる

「で、何?」

「何か面白い話題つてない?」

くだらないだらうと思つてはいたがこんなにもくだらない内容とは思つておらず、そんな事を思つ暇があるならもう少しスピードアップしそうシ一と言いたいところだが、どうせ言つても聞かないことは去年一年生の時の付き合いで既に承知済みだったので、しょうがなく面白そつな話題をさがすことにした。

「存在するものしないもの。この話つてしたつけ?」

「でた。オカルトマニア話

「つるさいわね。あんただつてゲームマニアじゃない」

「アタシはゲームが好きなだけでマニアじゃないわ」

「同じことよ。で? 聞くの? 聞かないの?」

「聞く」

案外素直な答えに最初からケチをつけなければいいと思つたが、これまた去年の記憶から無駄だと分かっているので話を続ける。

「この世には存在するものとしないものがいるの」

「何それ? 影と本体みたいな?」

「いじトコつこてるわね。ドッペルゲンガーッて知つてる?」

「知つてゐる。この間やつたばっかだから」

「何それ? 影と本体みたいな?」

「それ、ゲームの話でしようが。まあ、いつか。説明の手間が省けたし」

「で？ そのドッペルゲンガーがどうしたの？」

「最初にいったとおり。この世にはね？ 存在するものとしないものがないの・・・それは月の無い夜に牙を向く・・・」

しばらくして、ようやくその日の作業が終わり、終りそうにないので持つて帰れるものがあれば数名は家にて残業が確定した。そんな中、クラスの大半に

「みんなが持つて変えるならアタシも何個か持つて帰ろうか？」

「・・・お前は持つてかえるとみんなの仕事を増やすからやめてくれ！・・・」「」

と猛反対をくらいい本日一番なにもやつていなかつた葉子だが、荷物は朝と相変わらず軽いまま帰つていぐ。頭は朝よりすこし重くなつた気がするが・・・

結局あの後途中から一人とも話に熱中してしまい、手が止まつていたおかげで作業も進まず知里は何個かの鍵を持つて帰つて作業をするハメに。葉子は持つて帰らせるわけにもいかないので天罰として鉄建制裁をくらつたのだった。

「くつそー杉野の奴ー思いつきり殴つたわね・・・」

葉子は頭をさすりながら夕方の帰り道をいつもじおつ歩いて帰つていぐ。

「今日・・・確か新月だったかな・・・？」

今日は、月の無い夜
・・・

「たつだいまー」

葉子はやつ言いながらドアを開けると、

「聞違えました」

と言つて何故かドアをパタンと閉める。
そして、もう一度表札を確認し、自分の記憶をたどつてちゃんと自分の家だといふとを確認すると、自分の家のはずなのにいやな汗を垂らしながらドアノブを握り、ソッと開ける。
するとそこには・・・

「おつかえり～葉子～～たつきなんで閉めちゃったの？パパ、見知らぬ人にこんな恥ずかしい」としちゃったのかと思つちゃつたじゃないか

「いえ、父上、それ十分身内からみても変質者ですから。むしろ身内だからこそかなり恥ずかしいのですが」

そこに居たのは、両手を広げて何故か鬼のパンツを穿いた葉子の父、
皆野駿すべるだった。

「てか、どうせん。なんで鬼のパンツなんか穿いてんの・・・？今9月だよね？鬼全然関係ないよね」

「これ？これは今度父さんのところで発売する商品だよ サンプル貰つてきちゃつた」

駿はそうこういつと笑つ（氣持ち悪い）。

実は葉子の父は有名な衣類を作っているところで、駿はなんと商品開発部の部長で、頼りがいのある上司なのだが、家に帰るとただの

「葉子の分もあるよ？ 着て見る？」

「あつはつは。冗談はいい加減にしきつて。年老えり。つこでこよるなメタボ予備軍」

ただの親ばかだつたりする。

しかも、抱きつこうとすると鞄を投げられ見事顔面直撃。

結構子ども自身には嫌われてたりする。

そんな態度に駿はちよつぴり涙田になつながら、ロビングまで走つていいく。

「うわあああああん……葉月^{はづき} - ツ - 葉子が反抗期に突入してゐるよ

ー！ 冷たいよー！」

「あひあひ！」

そして、思いきりドアをあけ、中で夕食の準備をしていた妻の葉月に抱きつぐ。

それもこいつものことなのか、葉月は持つていた包丁をゆきへつと置いて、頭を数度なぐる。

そんなことをしていると、あきれ顔をした葉子が続いて入つてくる。

「お母さん、甘やかしそぎなんだつて。どこが良かつたのや。駿つて名前負けしてんじやん」

「お父さんはね。とつても優しかつたのよ？ そんなこと言つちやだめじやない」

「葉月ーー！」

「はあ、まつたく面影もないね。ほら、どきなよとつせんーお母さんがー飯の準備できないじやないー！」

「いやあああ……はなれなーい……」

「ほらほら、お父さん。後で遊んであげますから」

「ほんとかー? よつしゃー……」

「(いい年こいたオッサンが、あのはしゃぎつぱり……)」

あんなオッサンが実の父親なんて泣けてくる。

そう、自分の両親の行動にあきれながら、葉子は自分の部屋へいき、とりあえず着替えることにする。

「はーあ、今日も疲れたなー……」

そう言つてベットにかばんを放り投げ、履いていたスカートをハンガーにつるすと、自分自身もベットへと沈む。

実際は今日一番働いていないのが葉子なのだが、当の本人は頑張つたがんばったと自画自賛しながらそのまま誘われるままに眠りにつこうとしていた……が、

ヴヴヴヴヴ……ヴヴヴヴヴ……

「あ?」

同じくベットに放り投げていた携帯が単調な振動を繰り返し、メールが届いたことをしらせる。

葉子はめんづくわづくにしながらも、それを拾い上げ内容を確認する。

葉子へ

さつそくなんだけど、本題には
いる……

今日、鍵に紐通す仕事してたで
しょ？あの紐なんだけどさ、な
んか足りなさそうだから、アン
タの家の近くにある百均でよさ
そつなの買つてきて！－！

急いでるから、明日までによろ
しく！－！

by 知里

「ひも・・・ねえ」

そう呟くと、葉子は部屋にかけている時計を見る。と、それは7時
12分を表示していた。

確か・・・

「百均つて閉まるの7時50分・・・だつたよな・・・」

自転車を飛ばせば、葉子の家から近くにある百均までは約15分
今からでなければ間に合わず、明日の朝買おうにも百均が閉ぐるのは
朝8時。どう考えたつて遅刻する。

しばらく時計を眺めたまま固まつていた葉子だが、すぐさま我
に返ると

「なんでこんな時間にメールすんのよ－！－！知里のバカ－－！－！
－！」

ほつぼり投げたスカートをつかみ取りすぐさま履くと、次にかばんの中から財布を取り出しその辺にほつぼり投げているハンドバックに突っ込む。

そして、急いでリビングへ行って親に”買出し行ってくるーーー”と口早に告げると、玄関に置いてある自転車の鍵をひとつかみ、大慌てで出て行つた。

夜は、これから始まるといつに・・・

中編（後書き）

久しぶりの投稿で、こんなので「めんなさい」。

しかも、当初考えていたより続きます。

次で最後にするつもりですので、もしよければお付き合いでしてください」と、うれしいです。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9217d/>

存在するものしないもの

2010年10月10日13時08分発行